

[A年] 降誕前第8主日(2020年11月1日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書44章6～17節**

- 6 イスラエルの王である主
イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。
わたしは初めであり、終わりである。
わたしをおいて神はない。
- 7 だれか、わたしに並ぶ者がいるなら
声をあげ、発言し、わたしと競ってみよ。
わたしがどこしえの民としるしを定めた日から
来るべきことにいたるまでを告げてみよ。
- 8 恐れるな、おびえるな。
既にわたしはあなたに聞かせ
告げてきたではないか。
あなたたちはわたしの証人ではないか。
わたしをおいて神があるのか、岩があるのか。
わたしはそれを知らない。
- 9 偶像を形づくる者は皆、無力で
彼らが慕うものも役に立たない。
彼ら自身が証人だ。
見ることも、知ることもなく、恥を受ける。
- 10 無力な神を造り
役に立たない偶像を鑄る者はすべて
- 11 その仲間と共に恥を受ける。
職人も皆、人間にすぎず
皆集まって立ち、恐れ、恥を受ける。
- 12 鉄工は金槌と炭火を使って仕事をする。
槌でたたいて形を造り、強い腕を振るって働くが
飢えれば力も減り、水を飲まなければ疲れる。
- 13 木工は寸法を計り、石筆で図を描き
のみで削り、コンパスで図を描き
人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り
神殿に置く。
- 14 彼は林の中で力を尽くし
樅を切り、柏や檜の木を選び
また、樅の木を植え、雨が育てるのを待つ。
- 15 木は薪になるもの。
人はその一部を取って体を温め
一部を燃やしてパンを焼き
その木で神を造ってそれにひれ伏し
木像に仕立ててそれを拝むのか。
- 16 また、木材の半分を燃やして火にし
肉を食べようとしてその半分の上であぶり
食べ飽きて身が温まると
「ああ、温かい、炎が見える」などと言う。
- 17 残りの木で神を、自分のための偶像を造り
ひれ伏して拝み、祈って言う。
「お救いください、あなたはわたしの神」と。

【使徒書日課】 ローマの信徒への手紙3章21～28節

²¹ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。²²すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。²³人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、²⁴ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。²⁵神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。²⁶このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。²⁷では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。²⁸なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

【福音書日課】 マタイによる福音書23章25～36節

²⁵律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縱で満ちているからだ。²⁶ものの見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれになる。

²⁷律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。²⁸このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。

²⁹律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしているからだ。³⁰そして、『もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかったであろう』などと言う。³¹こうして、自分が預言者を殺した者たちの子孫であることを、自ら証明している。³²先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ。³³蛇よ、蝮の子らよ、どうしてあなたたちは地獄の罰を免れることができようか。³⁴だから、わたしは預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。³⁵こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべて、あなたたちにふりかかってくる。³⁶はっきり言うておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってくる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書44章6～17節

- 6 イスラエルの王なる主
イスラエルを贖う方、万軍の主はこう言われる。
私は初めてあり、終わりである。
私のほかに神はいない。
- 7 誰が私と同じように宣言し
これを告知し、私に並べ立てるだろうか。
私がとこしえの民を起こしたときから
起ころうとすること、来るべきことまで
彼らに告知させよ。
- 8 恐れるな、おびえるな。
昔から私はあなたに聞かせ
告げてきたではないか。
あなたがたは私の証人。
私のほかに神があるうか、
私のほかに岩があるうか、私はそれを知らない。
- 9 偶像を形づくる者は皆、空しく
彼らが慕うものは役に立たない。
彼ら自身が証人だ。
彼らは見ることもできず、知ることでもできず
ただ恥じ入るだけだ。
- 10 誰が神を形づくり
何の役にも立たない偶像を鑄たのか。
- 11 見よ、その仲間たちは皆恥じ入る。
職人たちは人間にすぎない。
皆集まって立ち向かうが
恐れて共に恥じ入る。
- 12 鍛冶職人は炭火で斧を作り、槌でそれを形づくる。
力ある腕でそれを作る
腹がすけば力がなくなり、
水を飲まなければ疲れてしまう。
- 13 木工は測り縄を張り、筆で印を付け
小刀で造り上げ、コンパスで印を付け
人の形に似せて
人間の美しさに似せて造り、神殿に置く。
- 14 彼は杉を切り
松や樺の木を選んで
林の木々の中で育てる。
また、月桂樹を植え、雨がそれを成長させる。
- 15 それは自分の薪となる。
人はそれを取って暖まり
燃やしてパンを焼く。
さらに、神を造ってそれを拝み
偶像に仕立ててその前にひれ伏す。
- 16 また、その半分を火の中で燃やし
その上で肉をあぶって食べ
あぶり肉で満ち足りる。
さらに、暖まって
「ああ、暖かい、炎を感じる」と言う。
- 17 そしてその残りを神に造り上げ、自分の偶像とし
その前にひれ伏して拝み、祈って言う。
「救ってください、あなたは私の神だから」と。

ローマの信徒への手紙3章21～28節

²¹しかし今や、律法を離れて、しかも律法と預言者によって証しされて、神の義が現わされました。
²²神の義は、イエス・キリストの真実〔別訳→への信仰〕によって、信じる者すべてに現わされたのです。そこには何の差別もありません。²³人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって
いますが、²⁴キリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより価なしに義とされるのです。
²⁵神はこのイエスを、真実による、またその血による〔別訳→その血による、また信仰による〕贖いの座〔別訳→奢めの献げ物〕とされました。それは、これまでに犯されてきた罪を見逃して、ご自身の義を示すためでした。²⁶神が忍耐してこられたのは、今この時にご自身の義を示すため、すなわち、ご自身が義となり、イエスの真実に基づく者〔別訳→イエスを信じる者〕を義とするためでした。
²⁷では、誇りはどこにあるのか。それは取り去られました。どんな法則〔別訳→律法〕によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。²⁸なぜなら、私たちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

マタイによる福音書23章25～36節

²⁵律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは、杯や皿の外側は清めるが、内側は強欲と放縦で満ちている。
²⁶ものの見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側を清めよ。そうすれば、外側も清くなる。
²⁷律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。²⁸このようにあなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法とでいっぱいである。
²⁹律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしている。³⁰そして、『もし先祖の時代に生きていたら、預言者の血を流す側には付かなかっただろう』などと言う。³¹こうして、自分が預言者を殺した者たちの子孫だと、自ら証明している。³²あなたがたも、先祖たちが犯した罪の弁目を〔直訳→先祖たちの弁目を〕満たすがよい〔異本→満たすことになる〕。³³蛇よ、毒蛇〔クサリヘビ〕の子らよ、どうしてあなたがたはゲヘナの裁きを免れることができようか。
³⁴だから、私は預言者、知者、学者をあなたがたに遣わすが、あなたがたはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと迫害して行くであろう。³⁵こうして、正しい人アベルの血から、あなたがたが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血がごとく、あなたがたにふりかかってくる。³⁶よく言うておく。これらの報いはみな、今の時代の者たちに降りかかってくる。』

黙想のためのノート**次末日聖書日課について**

・11月1日「降誕前第8主日」の日課主題は「墮落」。「墮罪」のテーマは、先主日の聖書日課がすでに視野に入れていたように、「聖書」全体を貫く大きな問題設定である。

・通俗的な「墮罪」論では、創世記3章を典拠にして、「最初の人アダム」が犯した罪が「遺伝」によって伝播したために「原罪」を全人類が負っている、と論じられてきたが、この「原罪」論は古代教父アウグスティヌスの論に多くを拠っている。アウグスティヌスは、自らの青年期の放縦生活に対する反省もあり、「罪」を伝播させる行為として「性行為」を極端に否定的に位置づけてこの「原罪」論を展開したため、おもに彼の神学的遺産を受け継ぐことになった西方教会では、性に関連する事柄全般に対する潔癖症的な観念が建前として強調されてきた。それによって、性的な問題に関連する罪過が、他の罪過に比べて極端に深刻な罪として扱われ、厳罰対象にされるというようなことが、特に女性に対して行われてきた。東方教会(ギリシア正教会系)が一般に司祭の妻帯を常としているのに対して、西方教会(カトリック・プロテスタント系)に司祭の独身制が広く実践されてきたのも、この「原罪」論に大きな影響力があったからである。プロテスタント教会は一般に牧師・司祭の妻帯を認めるが、それでも、「性」に関連する事柄全般に対して極端な見解を建前として保持している場合が、特に福音派系教会などの中でなお見受けられる。このような神学的伝統を無意識のうちに継承している側面があることを踏まえて、「墮罪」や「原罪」の問題を扱うときには、意識的に「性」に関する事柄と「罪」とを短絡させないことが求められる。

・この日は11月第一日曜日で、行事暦「聖徒の日」と定められている。「聖徒の日」は、西方教会で古くから守られてきた11月1日「諸聖人の日」および同2日「全死者の日」の趣旨を継承して主日に設定されるようになってきた行事日。現在のローマ・カトリック教会では、この趣旨を月間に拡大して11月を「死者の月」として記念している。

旧約日課(イザヤ44章より)

・「イザヤ書」は、旧約・預言書(ユダヤ教正典では「後の預言者」)の第一に置かれている書で、「エレミヤ書」および「エゼキエル書」と共に「三大預言書」に数えられ、旧約における「預言者」の位置づけに対して大きな方向性を与える役割を担っている。「イザヤ」の名が付されているが、歴史上の預言者「イザヤ」に直接関連する預言および活動物語として記されているのは39章まで(聖書学者は「第一イザヤ」と呼ぶ)であり、40章以下(「第二イザヤ」と呼ばれている)は、預言者「イザヤ」の預言活動を継承する弟子預言者の系譜に属する者らが、イザヤの時代より100年以上後に行

った預言活動に基づくものと考えられる。この預言者らの系譜は、エレミヤやエゼキエルら他の預言者らを包含する系譜としてユダヤ人社会の中で位置を保ち、バビロン捕囚を経て解放帰還後に「律法と預言者」と呼ばれる正典編纂の中心的役割を担ったと推測される。

・日課箇所は、「第二イザヤ」の中に置かれている預言。基本的な神学姿勢は「真の神を神とする」という徹底した「神中心主義」にあり、8節まではその点が定型的な表現で告げられている。それを受けて、後半9節以下では、「偶像」礼拝に対する批判が、皮肉を交えて重ねられている。

使徒書日課(ローマ3章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロがローマの教会に宛てた書簡で、自らのローマ訪問計画を示して受け入れを求めると共に、その先に計画しているエスパニア伝道のために協力してもらえよう申し入れることを目的に記されている。そのために、自分の目的としてきた異邦人伝道(ユダヤ人と異邦人の双方の救い)についての神学的基礎づけを示すことによって、ローマ教会の人々が同じ動機づけに根差す協力者となってくれることを期待している。3章までは、その神学的基礎づけについての概要を示す部分で、その終盤の一部である。

・ここには、いわゆる「信仰義認」論が示されている。信仰義認論(「信仰によって義とされる」)は、16世紀に始まった宗教改革でM.ルターら改革推進派が主唱した中心提題と考えられることがあるが、必ずしもそういうわけではない。ルターらは、当時のカトリック教会で行われていた「贖宥状(免罪符)」を信仰義認の神学から逸脱するものとして糾弾し、「人が救われるのは、律法の行いによってではなく、信仰によってである」と主張したが、そもそもこのような問題設定をしたのは、使徒パウロである。パウロの主張は、端的に「人が救われて神との関係を回復するのは、人が律法の実践によってユダヤ人となることによってではなく、神がキリストにおける御業によって《失われた者》の回復(死と復活)をなされることを明らかにされたという良い知らせ(福音)をただ信じて受け入れることによってである」というものである。ここでパウロが念頭に置いているのは、異邦人が如何に救われうるのかという問題であり、最終的には同じプロセスによってユダヤ人も異邦人も救いに至るという結論に達するのであるが、パウロの考えの中では、ユダヤ人は生まれながら「律法の実践」に生きるようにされているので、彼らはその恵みの内に留まるべきだという発想がある。ただ、実際のユダヤ人はその恵みにとどまっていることができていないので、異邦人と同じような救いのプロセスを必須とするのだ、とパウロは考えている。

・22節および25節「イエス・キリストを信じる…」と訳されている部分について、聖書協会共同訳は「イエス・

キリストの真実」という訳を採用している。これは、「ピステイス・トゥー・クリストゥー」というギリシア語の解釈に関する議論を反映した訳で、「クリストス」の属格形「クリストゥー」を「ピステイス」に対して目的格的に「キリストに対するピステイス」と解釈するか、主語的に「キリストのピステイス」と解釈するかという問題、それにもない「ピストゥス」をどのような性格の語として訳すかという問題が、半世紀以上にわたって論じられてきている。「ピステイス」は、通例「信仰」と訳され、場合によっては「誠実」と訳されているが、「信頼」や「忠実」というニュアンスの用語であるが、これがキリストの属性として言われる場合の訳語が定まらないできたため「信実」などの造語も用いられてきた。

・「律法」は「ノモス」の訳語であるが、27節「法則」と訳されている語も「ノモス」である。「ノモス」の語義は「法／法則」であるが、旧約における「トーラー」のギリシア訳語として「ノモス」が充てられたため、「律法」という「法」を連想させる訳語になっている。旧約の「トーラー」の中には「法」と訳される別の語「ミシュパト」があり、「トーラー」は多くの場合に「教え」と訳されている。パウロが「ノモス(律法)」を論ずるときには、旧約の「トーラー」を念頭に論じている場合と、「ミシュパト」を念頭に論じている場合があり、それによって矛盾した「律法」評価をしているような主張が生じている。しかし、パウロは総じて、神の「トーラー(教え)」を全面的に肯定しているのに対して、ユダヤ人的生活習慣を規定するところの「ミシュパト(法)」(また「掟」や「戒め」なども)の実践における問題性を指摘しているのである。

・「贖い(アポリュートローシス)」は「解放」を意味する語で、聖書の用例では「奴隷や質草を対価を支払って買い戻す」意味で用いられている。日本語の類義語「購い」は「買う(購買)」という意味。

福音書日課(マタイ 23 章より)

・日課箇所は、主イエスが受難の週にエルサレムで過ごされる中、弟子たちや群衆を前にして、律法学者たちやファリサイ派の人々を非難したとされる言説がまとめられている部分の一部である。そこで指摘されているのは、「正しさ(ディカイオス)」の問題である。これは、パウロが信仰を論じるときに必ず触れる「義(ディカイオシュネー)」についての問題意識と同じ視点である。パウロは、人が救われるのに必要なのは「神の義」であるとし、その「神の義が」示されたところの「キリスト」を信じることを出発点として説いた。一方、主イエスが日課箇所の問題にするのは、神から遣わされたところの「正しい人」を拒み、自らの「正しさ」を拠り所としようとする人々の欺瞞であり、その言行不一致の姿である。パウロの問題意識(回心の原点)は、主イエスにそのような者としての姿を指摘されたとの霊的経験にある。

来週の誕生日 (11月1日～7日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-224 番「われらの神、くすしき主よ」(= I-73 番「くすしきかみ、たえなる主よ」)は、17世紀ドイツ改革派牧師で敬虔派の影響を受けて讃美歌創作をした J.ネアンダーの作詞。曲は、この歌詞を自身の歌集で発表する際にネアンダー自身が指定して掲載した曲(作曲者不詳。ネアンダーの自作?)。
- ・21-490 番「かみさまに感謝」は、『こどもさんびか2』(1983年版)の編集作業の中で、編集委員で当時左内坂教会牧師の花房泉一が作詞した歌詞に、同じく編集委員で作曲家の阿佐ヶ谷教会員・小山章三が曲をつけて同歌集の1番に置かれた。
- ・21-433 番「あるがままわれを」(= I 271「いさおなき我を」)は、19世紀英国の女性讃美歌作家シャーロット・エリオットの作詞した歌詞を、同時代の米国の教会音楽家ウィリアム・ブラドベリーが自身の作曲した曲と組み合わせで歌集で発表した。北米では教派を超えて現在も広く歌われている。原歌詞に合わせて訳詞が手直しされている。

21-224「われらの神、くすしき主よ」

Wunderbarer König

1. Wunderbarer König, Herrscher von uns allen, / laß dir unser Lob gefallen; / Deines Vaters Güte hast du lassen triefen, / ob wir schon von dir wegiefen: / Hilf uns noch, / stärk uns doch; / laß die Zungen singen / laß die Stimmen klingen.
2. Himmel, lobe prächtig deines Schöpfers Thaten, / mehr als aller Menschen Staaten. / Großes Licht der Sonne, schieße deine Strahlen, / die das große Rund bemalen; / lobet gern, / Mond und Stern, / seid bereit zu ehren / einen solchen Herren!
3. O du meine Seele, singe fröhlich, singe! / singe deine Glaubenslieder; / was den odem holet, jauchze, preise, klinge; / wirf dich in den Staub darnieder! / Er ist Gott / Zebaoth! / Er nur ist zu loben, / Hier und ewig droben.
4. Hallelujah bringe, wer den Herren kennet, / wer den Herren Jesum liebet; / Hallelujah singe, welcher Christum nennet, / sich von Herzen ihm ergiebet. / O wohl dir! / glaube mir: / endlich wirst du droben / ohne Sünd ihn loben!

21-433「あるがままわれを」

Just as I am, without one plea

1. Just as I am, without one plea, / but that thy blood was shed for me, / and that thou bidst me come to thee, / O Lamb of God, I come, I come.
2. Just as I am, and waiting not / to rid my soul of one dark blot, / to thee whose blood can cleanse each spot, / O Lamb of God, I come, I come.
3. Just as I am, though tossed about / with many a conflict, many a doubt, / fightings and fears within, without, / O Lamb of God, I come, I come.
4. Just as I am, poor, wretched, blind; / sight, riches, healing of the mind, / yea, all I need in thee to find, / O Lamb of God, I come, I come.
5. Just as I am, thou wilt receive, / wilt welcome, pardon, cleanse, relieve; / because thy promise I believe, / O Lamb of God, I come, I come.
6. Just as I am, thy love unknown / hath broken every barrier down; / now, to be thine, yea thine alone, / O Lamb of God, I come, I come.